

令和 5 年 5 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12412

研究課題名（和文）日英語の省略現象に課される意味変換性に対する統語研究

研究課題名（英文）A Syntactic Analysis on Meaning Change in Elliptical Constructions in Japanese and English

研究代表者

前田 雅子（Maeda, Masako）

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：00708571

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の第一の目的は、「省略は文の意味を変える」という仮説を様々な省略構文で検証し、その記述的一般化を試みることである。第二の目標は、同現象に影響する音・意味・統語の言語原理を解明することである。第一の目標に関しては、日本語の項削除文、Verb-Echo Answer文（VEA）、Particle-Stranding Ellipsisなどにおける数量詞や否定辞の作用域が、対応する非削除文とは異なることを明らかにした。第二の目標に関しては、削除文の意味変化が主要部移動や数量詞繰り上げなどの移動操作に依存すると主張し、それらの特性を説明するには音韻削除分析がより妥当であることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、「省略は文の意味を変える」ということを様々な削除文において実証するものであり、その過程において削除文の数量詞解釈・否定辞の作用域・削除可能な要素の特性・削除部からの移動可否などの多くの特性を明らかにしてきた。これらのことから、本研究は日英語の統語論研究の経験的発展に寄与するものである。また、削除文の派生方法に関して、移動と削除の相互作用や削除の適用可能性、削除文特有の（主要部）移動などを研究し、それらの成果Linguistic Inquiry, Syntaxなどの国際誌や、多くの国際・国内学会などで広く公開したことで、削除文についての統語理論にも貢献した。

研究成果の概要（英文）：The aims of this project are (i) to clarify that ellipsis changes the meaning of a sentence, and (ii) to research on the underlying phonological, semantic, and/or syntactic mechanisms of such meaning change under ellipsis. For the first purpose, I examined various elliptical constructions in Japanese and English, including Argument Ellipsis, Verb-Echo Answers, and Particle-Stranding Ellipsis, and clarified that scopes of quantifiers and negation may be different in the elliptical sentences. I attribute the scope change to syntactic movement mechanisms such as head movement and quantifier raising, thereby suggesting that phonological deletion analysis might be a more suitable analysis for ellipsis.

研究分野：統語論

キーワード：削除 数量詞の作用域 主要部移動 wh移動

## 1. 研究開始当初の背景

生成文法では、大きく分けて二つの省略分析が提案されてきた。一つは、統語・意味は非省略文と変わらず、音を消すという分析(PF 削除分析)であり、もう一つは、省略部分は統語・音韻構造を持たず、文脈から意味だけをコピーするという分析(LF コピー分析)である。いずれの分析においても、省略文は非省略文と意味が変わらないと仮定されることが多かった。

これに対し、本研究では、省略は文の意味を変えるという仮説を立て、日英語を中心とした実証研究を行う。この仮説が立証された場合、省略には意味部門の操作が深く関わるため、LF コピー分析の支持に繋がると予測される。他方、上記の仮説が反証された場合、省略は意味を変えず音を削除するだけであるという PF 削除分析の妥当性が高まると予測される。

## 2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、「省略は文の意味を変える」という仮説を様々な省略構文で検証し、その記述的一般化を試みることである。第二の目標は、同現象に影響する音・意味・統語の言語原理を解明することである。この目的を達成するために、(i)日英語を中心とした多様な省略文を収集・精査し、それをもとに(ii)「省略は文の意味を変える」という仮説を検証する。同時に、それらの事実を分析するために(iii)省略文にかかる音・意味・統語制約の解明・提案を行う。特に、(ii)の仮説が立証された場合は、省略には意味部門の操作が深く関わりと考えられるため、省略部分は統語・音韻構造を持たず、文脈から意味だけをコピーするという LF コピー分析に基づく提案を行う。(ii)が反証された場合は、統語・意味は非省略文と変わらず、音を消すという PF 削除分析に基づく提案を行う。また、(ii)が一部反証された場合は、LF コピーと PF 削除のどちらの省略方策を用いるかに関して、言語間差異・構文間差異が見られるという分析を提案する。また、省略と意味変化に関して、統語 - 意味のインターフェースに基づく分析も提案する。さらに、省略文の残余部にかかる音韻強勢などの制約に関して、統語 - 音のインターフェースという観点から分析を提示する。これらの段階は同時進行で進める。また、国際誌や国内外の学会などで広く研究成果を公表する。

## 3. 研究の方法

日英語を中心とした多様な省略文を収集・精査し、それをもとに「省略は文の意味を変える」という仮説を検証する。同時に、それらの事実を分析するために省略文にかかる音・意味・統語制約の解明・提案を行う。これらの段階は同時進行で進める。まず、日英語において節省略、項省略、動詞句削除、名詞句削除などの様々な省略構文を文献研究やインフォーマントの内省調査により収集し、その特性を精査・比較検証する。特に、数量詞や焦点要素の省略現象を考察対象とする。数量詞や焦点要素は談話上重要な意味を有し、音韻強勢や統語移動も示すことが多い。そのため、省略によりそれらの要素の音が消失したときに起こる意味・統語構造の変化の検討は重要な新しい事実の発見に繋がる可能性が高い。

様々な省略文における意味変化や統語・音韻・意味特性を明らかにするとともに、それらに対して妥当な分析が LF コピー分析であるか PF 削除分析であるかを検証する。

## 4. 研究成果

本研究は、「省略は文の意味を変える」ということを様々な削除文において実証するものであり、その過程において削除文の数量詞解釈・否定辞の作用域・削除可能な要素の特性・削除部からの移動可否などの多くの特性を明らかにしてきた。

本研究期間中、日英語の多くの削除文についてその統語・意味・音韻特性を明らかにしてきた。例えば、日本語の項削除文、Verb-Echo Answer (VEA)、Particle-Stranding Ellipsis(PSE)などにおける数量詞や否定辞の作用域が、対応する非削除文とは異なることを明らかにした(VEA と PSE については、津田塾大学佐藤陽介氏と共同研究した)。まず、日本語の項省略文における数量詞の作用域解釈の変化については、(i)音韻部門で音を消すという PF 削除分析、(ii)日本語の述語の形態的特性(膠着性)による移動要請、(iii)統語 - 意味部門のインターフェースにおける数量詞の作用域の経済性(Fox 2000)の相互作用により統語分析した。この研究成果は国際ジャーナル *Syntax* に掲載された。また、VEA における否定辞と数量詞の作用域の変化については、削除文でのみ強制される動詞の主要部移動によるものであると主張し、その論考が国際誌 *Linguistic Inquiry* に掲載された。さらに、PSE における意味変化についても、それが残余部の音韻強勢に

よるものであるという分析を提案し、それが国際誌 *Natural Language and Linguistic Theory* に掲載された。また、それらの研究成果を国際学会 The 41st GLOW conference などでも発表した。音韻強勢と意味変化に関しては、日本語の標準語、福岡方言における wh 句と焦点要素の介在効果の容認度の差を、それぞれの方言における wh 句のアクセントの違いと疑問文の音調の違いにより分析し、その研究成果を日本英語学会 workshop などでも口頭発表した。

また、日本語、韓国語の疑問文断片 (fragment questions) について、Pukyong National University の Haewon Jeon 氏と共同研究した。特に、疑問文断片では残余句である話題要素と疑問詞の語順が固定されることを明らかにし、それが節周辺部の意味に応じた豊かな階層構造を仮定するカーとグラフィー分析の経験的支持となると主張した。加えて、カートグラフィー分析に関しては、長崎方言の敬語接辞と可能・受け身接辞との共起制限から、日本語の動詞句領域の階層構造を明らかにすることを試みた。特に、敬語形態素と受け身形態素について、標準語ではそれらが音韻的に同一であるため共起制限がかかるのに対し、長崎弁ではそれらが異なる音韻を持つため共起できることを明らかにした。また、標準語における共起制限も、削除により受け身形態素が音韻的に顕在化しない場合(省略される場合)には緩和されることを明らかにした。これらの論考の一部は、神田外語大学遠藤喜雄教授との共著である「カートグラフィー(最新英語学・言語学シリーズ)」(開拓社、2020年)に収録されている。

削除文における統語・音韻インターフェース条件については、英語における as-倒置文、so-倒置文、比較倒置文における主語の位置と動詞句削除の関係を研究した。特に、移動のコピーの削除と動詞句削除が同じ削除操作に従うと想定し、倒置文における義務的動詞句削除は倒置文のラベル付けから動機づけられると主張した。さらに、同研究結果を全国紙 *English Linguistics* に投稿し、同論文が2021年度 EL 論文賞を受賞した。また、移動により生じるコピーが、ある種の削除操作の適用を受けるとする想定のもと、コピー削除が削除操作に適用される Scope Economy (Fox 2000)に従うと提案し、日英語の寄生空所構文の数量詞解釈を統語分析した。この研究は大阪大学の宮本陽一氏との共同研究であり、研究成果は国際学会 *Japanese/Korean Linguistics 30* などでも公表された。

さらに、研究期間を通して、その他の様々な削除文についても考察している。例えば、日英語の Andrews Amalgam について同志社大学瀧田健介氏と共同研究し、同構文を parenthetical sluicing の一種であると主張する論考を国際学会 *Generative Grammar in the Old World* などでも発表した。さらに、英語の等位接続間接疑問文縮約文について、同志社大学の瀧田健介氏と東北大学の中村太一氏と共同研究し、日英語において、非削除文で観察される Left Branch Extraction の非文法性が削除文でも同様に観察されることを示した。これは、削除文が非削除文と同じ移動制約に従う例であり、移動操作が適用される統語構造を前提とする PF 削除分析を支持するものである。同研究結果については、国際学会 *Japanese/Korean Linguistics 28* で口頭発表した。また、日本語の項削除が適用できないとされる wh 句について、その統語特性・移動特性・格標示の制限などを精査し、それらの特性が削除適用可能性とどのようにかわるかを考察した。それらの論考を *GLOW in Asia XIII*, the 15th ELSJ International Spring Forum などでも口頭発表した。また、大阪大学の宮本陽一氏との共同研究において、焦点要素として解釈される wh 句を残余句とする wh-stripping 構文の存在を明らかにし、日本語の wh-stripping 文には移動+TP 削除という派生と、分裂文を基底構造とする派生の両方が利用可能であると提案した。その研究成果を国際学会 *Workshop on Altaic Formal Linguistics 16* で口頭発表した。

本研究の目標は、「省略が意味を変える」ということを実証するものであり、その点については多くの実証研究で達成できたと考える。しかし、二つ目の研究目標であった「意味変化が見られる場合はLF分析が妥当であることを示し、意味変化が見られない場合はPF削除分析が妥当であることを示す」という仮説については、反証する方向で研究が進んだ。すなわち、様々な削除文で意味変化が見られるが、それらの意味変化は統語部門における主要部移動や数量詞繰り上げなどの移動操作により説明でき、そのため、派生において統語部門を前提とするPF削除分析を支持するものであると主張してきた。このように、当初の仮説を反証する研究成果を提示してきたものの、本研究は日英語の多くの省略文の統語・音韻・意味特性を明らかにするものであり、統語論研究の経験的発展に寄与するものである。また、削除文の派生方法に関して、移動と削除の相互作用や削除の適用可能性、削除文特有の(主要部)移動などを研究し、それらがPF削除分析により妥当に説明可能であることを示したことで、削除現象に対する統語理論の発展にも寄与してきた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Masako Maeda	4. 巻 38 (1)
2. 論文標題 Labeling in Inversion Constructions	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 91-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masako Maeda, Taichi Nakamura and Kensuke Takita	4. 巻 28
2. 論文標題 Left Branch Extraction in Coordinated Wh-Questions in Japanese and English	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics 28	6. 最初と最後の頁 49-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yosuke Sato and Masako Maeda	4. 巻 52
2. 論文標題 Syntactic Head Movement in Japanese: Evidence from Verb-Echo Answers and Negative Scope	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Linguistic Inquiry	6. 最初と最後の頁 359-376
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masako Maeda	4. 巻 1
2. 論文標題 The vP Cartography in Standard and Nagasaki Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西南学院大学外国語学部論集	6. 最初と最後の頁 39-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田雅子	4. 巻 60
2. 論文標題 介在効果に関する音韻分析－東京方言と福岡方言の対照分析－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西南学院大学 英語英文学論集第60巻第二・三号合併号	6. 最初と最後の頁 33-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masako Maeda	4. 巻 22
2. 論文標題 Argument Ellipsis and Scope Economy	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Syntax	6. 最初と最後の頁 419-437
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田雅子	4. 巻 60
2. 論文標題 介在効果に関する音韻分析－東京方言と福岡方言の対照分析－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 西南学院大学 英語英文学論集第60巻第二・三号合併号	6. 最初と最後の頁 33-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yosuke Sato and Masako Maeda	4. 巻 37
2. 論文標題 Particle Stranding Ellipsis Involves PF-Deletion	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Natural Language & Linguistic Theory	6. 最初と最後の頁 357-388
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masako Maeda	4. 巻 29
2. 論文標題 Feature-relativized Criterial Freezing	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies in Generative Grammar	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計29件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 14件)

1. 発表者名 Eri Tanaka, Masako Maeda and Yoichi Miyamoto
2. 発表標題 On Negative Island Effects and Exhaustification with Adjunct nani-o in Japanese
3. 学会等名 the 30th Japanese/Korean Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masako Maeda and Yoichi Miyamoto
2. 発表標題 Scope Properties of Parasitic Gaps in Adjunct Control in Japanese (poster presentation)
3. 学会等名 the 30th Japanese/Korean Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masako Maeda and Yoichi Miyamoto
2. 発表標題 Stripping with Wh-indeterminate Remnants in Japanese
3. 学会等名 Workshop on Altaic Formal Linguistics 16 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Masako Maeda, Taichi Nakamura and Kensuke Takita
2. 発表標題 Nominative Objects in Causative-Potential Constructions in Japanese
3. 学会等名 The 24th Seoul International Conference on Generative Grammar (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kensuke Takita, Masako Maeda and Taichi Nakamura
2. 発表標題 Varieties of Tough-Constructions in Japanese and FormCopy
3. 学会等名 Workshop at GLOW in Asia XIII (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Masako Maeda
2. 発表標題 Argument Ellipsis as Topic-Marking and A -movement in Japanese (flash talk)
3. 学会等名 GLOW in Asia XIII (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Masako Maeda
2. 発表標題 Ga/No-Nominative Conversion and A- and A -movement
3. 学会等名 The 15th ELSJ International Spring Forum (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Masako Maeda
2. 発表標題 Honorification in Standard/Nagasaki Japanese and Anti-Homophony
3. 学会等名 22nd Seoul International Conference on Generative Grammar (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Masako Maeda, Taichi Nakamura and Kensuke Takita
2. 発表標題 Left Branch Extraction in Coordinated Wh-Questions in Japanese and English
3. 学会等名 Japanese/Korean Linguistics 28 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 前田雅子
2. 発表標題 倒置と削除に関する labeling分析
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第73回大会シンポジウム英語学部門「焦点化現象に基づく統語構造研究」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Masako Maeda and Kensuke Takita
2. 発表標題 Syntactic Amalgams in Japanese (poster presentation)
3. 学会等名 GLOW 42 (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 前田雅子
2. 発表標題 カートグラフィとマイクロパラメター
3. 学会等名 日本英文学会第91回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 瀧田健介・前田雅子
2. 発表標題 日英語の統語的アマルガムについて
3. 学会等名 日本英文学会第91回大会シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masako Maeda and Haewon Jeon
2. 発表標題 Fragmentary Questions in Japanese and Korean
3. 学会等名 GLOW-in-Asia XII & SICOGG 21 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 前田雅子
2. 発表標題 介在効果の再考
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会ワークショップ「言語の多様性再考：外在化の観点から（北田伸一・北原久嗣・那須川訓也・前田雅子）」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 瀧田健介・中村太一・前田雅子
2. 発表標題 等位接続された残余句を含むスルーシングと島の修復
3. 学会等名 日本英語学会第37回大会シンポジウム「フェーズ境界を超える意味・音声解釈 フェーズ理論に基づく言語インターフェースの研究(金子義明・高橋将一・稲田俊一郎・瀧田健介・中村太一・前田雅子)」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yosuke Sato and Masako Maeda
2. 発表標題 On Syntactic Head Movement in Japanese and Its Interpretive Consequences: A New Perspective from Verb-Echo Answers and Negative Scope Reversal
3. 学会等名 The 41st GLOW conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 遠藤喜雄・前田雅子
2. 発表標題 副詞節に見る従属度の新たなタイポロジー
3. 学会等名 関西言語学会第43回大会シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masako Maeda
2. 発表標題 Feature-relativized Criterial Freezing: Evidence from Overt-Covert Movement Asymmetries and Multi-Criterial Movement
3. 学会等名 Workshop on Cross-linguistic Variation in the Left Periphery at the Syntax-Discourse Interface, as part of 2018 SNU International Conference on Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 前田雅子
2. 発表標題 日本語の疑問文断片
3. 学会等名 日本英語学会第36回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masako Maeda
2. 発表標題 Fragmentary Questions and the Left Periphery in Japanese
3. 学会等名 The Second Joint Meeting of NGR and FLC, (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小川芳樹・中山俊秀(編),小川芳樹、中山俊秀、石崎保明、時崎久夫、下地理則、縄田裕幸、新谷真由、鈴木亨、高橋英光、堀内ふみ野、前田満、青柳宏、秋本隆之、茨木正志郎、新国佳佑、和田裕一、岸本秀樹、森山倭成、杉崎鉦司、田中智之、前田雅子 他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 464
3. 書名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論3	

1. 著者名 遠藤喜雄・前田雅子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 260
3. 書名 カートグラフィー(最新英語学・言語学シリーズ)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------